



日本記者クラブ

研究会「首相の演説と日本の政治－政治における対話とはなにか？」

## 「nation」から「state」へ

平田オリザ 劇作家

2013年12月24日

鳩山首相の演説の起草と演出の経験から日本の政治を論じていただくようお願いしたが、その内容は極めて深く、広いものだった。日本は「文明」を輸出できる「state」ではなく、「nation」であること、「state」への脱皮なくして日本の未来はないことを力説された。それはまた「会話」型政治から「対話」型政治への移行を意味する。会話は親しい人同士のおしゃべりであり、「分かり合う、察し合う」文化であり、対話は知らない人との間の情報交換であり、価値観の異なる人同士が「説明し合う」文化である。民主党政権の最大の意味は、「nation」から「state」への変革にあったが、残念ながら民主党の議員にそのことの自覚が全くなかったという。これからの日本の政治のみならず、日本人のあり方を考えるうえで熟読すべき記者会見だった。

司会：橋本五郎 日本記者クラブ企画委員（読売新聞特別編集委員）

日本記者クラブ YouTube チャンネル

[http://www.youtube.com/watch?v=fsxk79EbsDc&list=UU\\_iMvY293APrYBx0CJReIVw](http://www.youtube.com/watch?v=fsxk79EbsDc&list=UU_iMvY293APrYBx0CJReIVw)

©公益社団法人 日本記者クラブ

**司会：橋本五郎・企画委員（読売新聞特別編集委員）** お待たせいたしました。ただいまから、今年1月から12月31日まで、202回の記者会見、最後を飾るのが平田オリザさんで、鳩山内閣のときにいろんな総理の演説の草稿を書き、おそらくいろんな振りつけもされたでしょう、そういう形で権力を支えていたということで、総理大臣、政治家の国民との間の対話、その方法、距離、いろんな角度からお話をさせていただこうと思います。それにとどまらないかもしれませんが、これから40分ぐらいお話しいただいて、それから質疑に入りたいと思います。

本日の司会は、企画委員の橋本です。よろしくお願いいたします。

それでは、平田さんよろしくお願いいたします。

### 日韓・日仏の往来

**平田オリザ・劇作家** よろしくお願ひいたします。政治の話は、ちょっと分からない、できないので、また具体的にどういうことがあったかということは本にも書いてきましたし、インタビューにもできるだけお答えをしてきましたが、足りないところがあれば、また後で、質問のときにお尋ねいただければ、できる限りお答えしたいと思います。その前段になる理念的なところとか、何を考えていたのか、民主党政権、明らかに失敗に終わったわけですけども、私からみて政権交代というのは何だったのかということ、少し理念的なところを前提として話をさせていただければと思います。

その前に、私、一応劇作家なので、少しだけ自分の自己紹介をいたします。演劇をつくるのが仕事で、これ（パワーポイントの写真）は2002年に新国立劇場の主催で、日韓ワールドカップのときに日韓合同公演をつくりました。左から4番目が三田和代さんです。1人飛ばした、もう1人、チマチョゴリを着ている方は白星姫（ペク・ソンヒ）先生という韓国の人間国宝クラスの俳優さんで、日本から6人、韓国から5人俳優が出て、合同でつくりました。これは日本と韓国の両方で、大きな新聞社から演劇賞をいただいた初めての作品になりました。

これ（次の写真）も日韓合同公演で、私の代表作「東京ノート」。いま14カ国語ぐらいに訳されていると思いますけれども、手前の2人は韓国の俳優です。奥の2人は日本の俳優です。

これ（次の写真）は「東京ノート」のフランス語版です。これもフランス人と日本人も出演して

います。

これ（次の写真）は僕がフランスでデビューしたときの一番最初のもので、リベラシオンに2面ぶち抜きで評論が出たときの記事です。

いま、大体15年ぐらい、フランスで主に活動をしております。大体毎年2カ月ぐらいはフランスに行き仕事をしております。

これ（次の写真）はもっと複雑で、日本とイランとフランスの俳優たち、3人ずつが出て、真ん中にいるのはイラン人です。これはフランスで制作した作品です。

これ（次の写真）も日仏です。

それから、これ（次の写真）は私がいま大阪大学でやっているアンドロイド演劇というので、左側にいるのがアンドロイドで、右側は人間、アメリカ人ですけども、こういった作品もつくっております。

これ（次の写真）はロボットです。ロボットを使った演劇もつくっております。

まあ、本業はこれなんですけれども、たまたま民主党政権の発足時に、当時の官房副長官の松井孝治さんから依頼を受けて、内閣官房参与という職に就きまして、まさか自分がそんなことをやることも思っていなかったのですけれども、総理の所信表明演説、施政方針演説、その他、幾つかの演説の原稿をお手伝いしてきました。

きょうは、その前に、先ほど橋本さんとも食事をしていたときに司馬遼太郎先生の話が出て、私、いま大阪大学におりまして、大阪大学は大阪外語と合併したものですから、司馬遼太郎先生うちのOBに自動的になってくさって、司馬さんが晩年、特に文明と文化という違いを、ずうっと前からおっしゃっているんですが、特に晩年、よくこういうことをおっしゃっていました。

文明というのは、「だれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」である。文化というのは、「不合理なもの、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもの、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的でない」というふうに書いています。

僕はいま阪大の大学院で教えていますので、学生たちによく説明するのは、例えば人間が服を着るようになる、裸で生活していた動物が服を着るようになる、これは文明です。だれもが共通した項目なのです。ただ、例えば和服であつたりとか、チマチョゴリであつたりとか、あるいはスコットランドでは男性でもスカートをはいたりとか、こ

ういうのは文化なわけです。この文化には、あまり根拠というか、もちろん風土に規定されるというところはあるけれども、では、何でスカートをはいたりズボンをはいたりするのかということの科学的合理性はないのです。ある種の不合理を含むものが文化だと言えらるるのです。

### 「文明」を輸出できない日本

これは司馬さんが井上ひさしさんとの対談で、井上さんもおっしゃっていることなんですけれども、日本は文化は輸出できても、文明は輸出できる国ではないのではないかと、いうことをずうっとおっしゃっています。要するに文明を輸出できる国というのは state です。アメリカ文明であるとか、ロシア文明であるとか、ヨーロッパ文明、EUです。あるいはせいぜいインド文明とかイスラム文明とか。日本文明という言葉はないのです。日本は文化なのです。

要するに、大きな多民族国家、その多民族国家の中で、さまざまに融合してもまれたものだけが輸出可能な文明になるのではないかと。そのことによって世界中の人々がナイフとフォークで食事をするようになったり、あるいは、例えば昔で言えば、言葉は違っても漢字文化圏、要するにみんなが漢字を使うようになったりする。漢字というのは便利なのです。多くの多民族が漢字を使うようになったり、いまで言えば iPhone ですか、スマートフォンを使うようになったり、あるいはジーンズを世界中の若者がはくようになった、これは文明なわけです。

僕はずうっと幾つか民主党政権時代に仕事をしていたのですが、前原さんに頼まれて、国交省の成長戦略会議の観光部会の座長もやっておりました。そのときに策定した目標の1つの1,000万人突破というのが、震災で一旦落ち込んで中断していたので、ことしできて大変よかった。

記者の皆さんなので、ご存じだと思いますけれども、当時の一番の問題は、JAL、日航の再建が問題で、航空部会が一番脚光を浴びていたのですが、その隣にあったのが国際部会で、新幹線をどうやって売っていくかという部会です。JRの方たちとかが来て、本会議のほうでヒアリングしたのですが、JRの方たちや日本のメーカーの方たちは口を開けば、技術では負けていない、と言うわけです。私たち一般庶民からすると、じゃ、売れよと思うわけです。何で売れないのかということなのです。

震災後も、外務省の日本のイメージ回復の委員

を頼まれてやっけていまして、そのときにも、原発は残念だったけれども、新幹線は全て1分以内に停車して、死者どころか1人のけが人も出さなかった、これはすばらしい技術だ。確かににすばらしい技術です。これを売っていく、アピールしていくべきなのではないか、確かにそのとおりだと思ふのです。

ただ、これも、僕はいま阪大の特に理系の学生と対話型の授業をしているので、よく言うのが、では、何で売れないのだろう。全く売れないわけではないです、台湾には売ったわけですが、何で売れないんだろう。幾つかいろんな意見が理系の学生から出てくるわけです。もちろん、よく知られているオーバースペックであるとか、いろんなことがありますけれども、僕がちょっと設問を変えるわけです、大学で。「では、君がドイツやフランスのメーカーだったら、何と言って日本を攻撃するだろうか」。いろんな意見が出ますけれども、僕が用意した意見は、「あれは日本人だからできることなんですよ」。

私、いま阪大に通っていますので、帰りとか、新幹線というのはちょっと遅れるとうるさいほどアナウンスしますね。「10分遅れています」、「7分取り戻しました」とか、「小田原駅を通過しました。5分回復しました」と。あんな国は日本だけです。

要するに、高速鉄道というのは文明なんですけれども、それを1分刻みで、3分遅れたらみんなが文句を言うというのは文化なのです。これが日本の特殊性であり、すばらしいところでもあるんですけれども、これは文化ですから、輸出できるものではないのです。

もし輸出できるとしたら、この日本の極端なパンクチュアルな文化、そのものを輸出しない限り、日本の新幹線は売れないはずなのです。でも、そのことをやろうとして日本は一度失敗しています。要するに大東亜共栄圏です。

日本あるいはドイツは、最強の中堅国家なので、時に自分たちの文化、非常に特殊な不合理なものを近隣諸国に輸出できるような錯覚に陥ってしまうのではないかと。でも、それはできないのです。実際には資源のない国なので、結局、兵たんが間に合わないです。ロジが間に合わないから、結局、そうすると侵略、進出していった先で食料を現地調達しなければいけなくなってしまう。それは帝国を築けない国ですね。僕は、それはいいことだと思ふのですが。

## まだ nation の日本

司馬さんがなぜ晩年、こういうことを繰り返しておっしゃっていたか、それは明らかだと思うのです。要するに、バブルということに対して、司馬さんは大変批判的で、僕はソニーのウォークマンというのは象徴的だと思うのですけれども、世界中の若者たちがイヤホンで音楽を聴くという画期的な、もしかしたらこれは文明を輸出したかもしれないです、一瞬間だけ一時的に。で、日本人の多くが、自分たちはもう一度世界に君臨できるのではないかと錯覚してしまったのだと思うのです。そのことを司馬さんは非常に批判をしていたのではないかと僕は考えています。これはもちろん異論もあると思いますが。

もう1つ、司馬さんは、よく「state」と「nation」の違いということをお書きになっています。stateのことを——これは司馬さんの定義です——「市民革命などを経て憲法を作り、法の下での統治を行う国家、文明を輸出できる国」。nationというのは、「民族、言語などを1つにして自然発生的に生まれてきた国家、文化を守る国」。これは司馬さん、政治学的には間違っただけ使われているのです。司馬遼太郎だから、あまりだれも突っ込めなかったということはあると思うんですけども、多分、司馬さんがおっしゃっているnationのほうがnation-stateで、要するに社会学で言うところのゲマインシャフトとゲゼルシャフトですね。自然発生的に出てきた共同体なのか、アメリカのように、自由という理念のもとに集まった、ある意味での利益共同体なのかということです。

日本というのは、これもいろんな解釈があると思います。明治維新によってnationからstateになったんだという考え方と、いや、いまだに日本はnationなんだという考え方です。僕は、司馬さんの定義で言えば、いまだに日本はnationなんだと思います。その一番のあかしが、自民党の長期政権であったと思います。nationでなければ、あんな不合理な長期政権が続くわけがないのです。

stateというのは、政権交代があつて、理念を闘わせることによって少しずつ国を発展させていくのがstateなのです。ところが、nationというのは、まあまあ、そこはひとつという、田中角栄さんに象徴される、要するに「10人もきょうだいがいれば1人や2人は共産主義者もいるだろう。でも、葬式のときはみんな一緒に酒を飲むんだ」、これはnationですよ。

民主党政権、繰り返しますが、民主党政権は大失敗だったと思います。しかし、その意味を最大限好意的に解釈するならば、あの政権交代はnationからstateへの変革を目指したのだと思うのです。もちろん、それはできなかった。できなかった最大の理由は、民主党の議員たちがそれを全く自覚していなかったということです、残念ながら。自分たちで自分たちのやったことの意味が全く分かっていなかった。ほんの一部の議員を除いてです。それは非常に残念だったと思います。

ここまでは前段です。

## 「対話」と「会話」

ここから言葉の話になるのですが、私は劇作家という話し言葉を書くという特殊な職業をしております。話し言葉というのは、普通はおしゃべりのことを連想するわけですが、話し言葉にはいろんなカテゴリーがあります。「演説」とか「スピーチ」とか「教授」、これは大学の授業の言葉です。それから「ディベート」、裁判の言葉です。「対話」、「会話」、「独り言」。

この中で、僕は、ずうっと「対話」と「会話」をきちんと区別することが大事だと言ってきました。対話というのはダイアログ (dialogue) です。会話というのはカンバセーション (conversation) で、これは英語では明確な違いがあるのですが、日本語ではほとんど違いが意識されてきませんでした。日本語の辞書を引くと、「対話」は「1対1でしゃべること」などというふうに書いてあります。ほとんど定義づけされていないということです。ちなみに、ケンブリッジの英英辞典では、ダイアログ、一番最初に「芝居や映画のせりふ」と書いてあります。2番目に「フォーマルなディスカッション」というふうに書いてあります。

私なりの定義は、会話というのは親しい人同士のおしゃべり、対話というのは知らない人との間でも情報の交換とか、知っている人同士でも価値観が異なるときに、それをすり合わせるのが対話、と呼べるのではないかと考えてきました。

日本は島国の村社会でのんびり暮らしてきましたし、特に稲作という文化は、南方由来の作物を高緯度地方でつくろうとすると、どうしても村全員で一緒に田植えをし、村全員で草刈りをして、村全員で一緒に稲刈りをしないと収量が上がらない。米、稲というのはそういう宿命を持っていますね。麦は個人経営でできるのですけれども、稲というのは村落単位で一生懸命頑張らないと

収量が上がらない。

ですから、非常に価値観の近い人々が何となくうまくやっていく社会を私たちはつくってきた。これを私は「分かり合う、察し合う文化」と呼んできました。

それに対してヨーロッパ社会というのは、宗教とか文化的な背景とかが全く違う人々が背中合わせに暮らしているわけですから、自分が何者であり、何を愛し、何を憎み、そしてどんな社会的な能力を持って社会に貢献できるかということをしちんと説明できなければいけない文化ですね。これを僕は「説明し合う文化」と呼んできました。

学生たちに僕がよく言うのは、これは文化の違いなので、よしあしではないし、まして優劣ではない。卑屈になる必要も何もない。私たちは、この「分かり合う、察し合う文化」の中で素晴らしい芸術をたくさん生み出してきました。例えば俳句や和歌のような、世界で最も短い詩の形を生み出してきました。

「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」と言っただけで、ここにいるほとんどの人が夕暮れの斑鳩の里の風景を思い浮かべることができる。こういう社会を、言語学の社会では「ハイコンテクストな社会」と言います。「コンテクスト」が酌み取りやすい社会です。私たちはこういうハイコンテクストな社会に生きてきました。決してそれは間違ったことではないわけです、文化の違いですから。

ただ、これから国際社会を生きていかなければいけない大阪大学の学生たちには、「この分かり合う、察し合う文化は少数派なんだよ。国際社会では、残念ながら、少数派なんだよ」と教えています。私たちは私たちの文化の中で生きているうちは、とても心地よく、そして美しい人間関係をつくれるんですけども、一步外に出ると、それだけでは通用しない、ということです。

僕は学生にさらにつけ加えます。「少数派の強みもありますよ」と。例えば、僕が生きているような芸術の世界です。冒頭申しあげたように、私は大体毎年フランスの国立劇場から依頼を受けて作品をつくるのですけれども、僕に作品の依頼が来るのは、私が日本人で、日本文化を背負って、日本語で作品を書いているからです。要するに、彼らの持っていないものを持っている。もしそうでなければ、もうパリには世界中からアーティストが集まってくるわけですから、英語の下手なやつ、フランス語もできないだめなやつ、という扱いですね。だけど、僕は彼らの持っていないもの

を持っていて、それを彼らに説明する能力を持っているので、私に仕事に来るわけです。これは少数派の強みです。

### 「説明し合う」文化

なので、これから国際社会を生きていかなければいけない日本人は、この分かり合う、察し合う文化を捨てるのではなくて、この分かり合う、察し合う文化を基盤にしながら、どうにかしてそれを説明する能力を身につける必要があるのではないかと、いうことを言ってきました。要するに、対話の能力というのがこれから重要になるのではないかとということです。

ただし、この「対話」というのは、いままで日本語の中に概念としてなかったわけです。例えば、よく言われることですが、日本語には対等な褒め言葉の語彙というのが極端に少ないです。皆さん、英語やフランス語でお話しになる方、多いと思いますが、腐るほどありますよね。「ビューティフル」とか「ワンダフル」とか、「マーベラス」とか、「アンビリーバブル」とか、いくらでもある。日本はないのです。

だから、上から下に「よくやった」みたいなのはあるし、下から上に「すごいですね」みたいなのはあるんですけども、対等な褒め言葉というのはほとんどないのです。だから、それが必要になってくると、外来語に頼らざるを得ないのです。「ナイスショット」とか「ナイスピッチ」とか。

唯一、1つだけあるのです。対等な褒め言葉で圧倒的に汎用性を持っているのが「かわいい」です。「かわいい」はどこでも使えるのです。いつでも使えるのです。だから、これだけ伝播したのです。で、そういう言葉をつくっていかなければいけない。

あるいは、いま女性の上司、男性の部下という人間関係が普通にありますが、女性の上司が男性の部下にきちんと命令する話し言葉はまだ確定していません。例えば「コピーをとっておけよ」という言葉がありますね。男性の上司が男性の部下に言ったら、これは普通ですよ。でも、女性の上司が男性の部下に言ったらどうですか。相当きつく聞こえますね。これは明らかに差別ではないですか。日本語にはこういう権力構造、あるいは差別構造が含まれているのです。要するに、フラットな関係で、きちんと相手と物を話したり指示を出したりするという日本語はまだないわけです。

しかし、ほかの言葉、例えば演説とかスピーチ

とか、大学の授業の言葉、あるいは裁判の言葉、これも自然発生的に出てきたものではないですね。これは明治期に、明治の日本人たちが血のにじむような努力でつくってきた言葉です。例えば旧帝国大学、最初の10年は、ほとんど全ての授業が英語かフランス語かドイツ語で行われていました。教科書も含めてです。しかし、ここは明治人のすごいところで、ほとんどの授業とほとんどの教科書を、たった10年でほぼ全て日本語にしてしまった。これは大変な能力ですね。ご承知のように、今でも途上国の多くは、大学の授業は英語か旧宗主国の言葉で行っているわけですから、これは大変な能力なわけです。

ただ、対話の言葉だけはつくられてきませんでした。なぜなら、明治期にはそれは必要なかったからです。大きな国家目標があって、それに従って生きていけば大抵の人が幸せになれた国家でしたから、そこでは異なる議論、異なる価値観をすり合わせるような対話の言葉というのは育ってこなかった。要するに、必要がなければ言葉というのは育ってこないわけです。これからつくっていかねばいけないのは、この対話の言葉、ダイアログの言葉なわけです。

余談ですが、第二次世界大戦が起こった、あれは、日本があれだけの悲惨な戦争に突っ込んでいった幾つかの理由があると思います。よく一般的に言われるように、植民地の競争に後から参加した日本、ドイツ、イタリアがああ戦争を起こしたんだというようなこともよく言われるわけですが、私は言葉が専門の人間なので、私の専門から言うと、要するに日本、ドイツ、イタリア、これは言語の統一が遅れた国なのです。ほぼこの3カ国は、1860年代に国家統一が行われ、言語の統一を急ぎます。イギリスやフランスは、これを100年から150年かけて行っているのです。

例えば、17世紀、パスカルの書簡の中に、ここから先はちょっと難しい話、哲学の話になるのでラテン語で書きます、という文献が残っているそうです。要するに、17世紀の時点で、まだフランス語では哲学は語れなかったのです。ラテン語でしか語れなかったのです。しかし、これが18世紀も半ばになりますと、同じフランス語で哲学も語れる、政治も語れる、裁判もできる、ラブレターも書ける、けんかもできる、これが言語の近代化です、そういうことを100年から150年かけて英語やフランス語は行ってきたわけですが、当然、後発国は近代化を急ぎますね。実学からどんどん改革していくわけです。留学生もそうですね、明治期の留学生、最初に送られた

のは医学とか建築とか実学ですね。日清戦争に勝って賠償金が取れて初めて、実学ではない文学とか音楽とか、夏目漱石とか瀧廉太郎が……。これは1900年に入ってからです。

言葉も同じだったわけです。要するに政治の言葉、裁判の言葉、法律の言葉、大学の授業の言葉、こういうものが全部整備されてきました。しかし、「対話」の言葉はつくられなかった。30年ぐらいで日本は日本語を近代化していきますから、1868年の明治維新から大体1910年ぐらいで近代日本語は完結するわけですがけれども、改革を急ぎますから、当然無駄なものは省いていきますよね。要するに、ここで「対話」の言葉というのがつくられなかった。

そして戦後も、戦後復興、高度経済成長、今度は経済優先の社会を築いてきたために、やはり「対話」の言葉がつけられなかったのではないかと、というのが私の基本的な考え方です。それが戦前においてはファシズムの温床になったのではないかとことです。要するに、異なる価値観をすり合わせるという国民的な風土が日本においてもドイツにおいても育たなかったのではないかと、という言葉の側からみた仮説です。

### 「冗長率」で考える

もう1つ、余談というか、脇道にそれますが、「冗長率」という言葉があります。これは言語学の世界で使う言葉なのですが、あるセンテンス、あるパラグラフの中で、意味伝達とは関係のない言葉がどれぐらい含まれているかという率です。これは一見すると、当然会話が一番冗長率が高くみえますね。無駄話というぐらいで、無駄がたくさん含まれているようにみえます。ところが、会話は知っている人同士のおしゃべりなので、あまり冗長率が高くないのです。一番冗長率が低いのは、長年連れ添った夫婦の会話です。「飯」、「風呂」、「新聞」。演説やスピーチは当然、冗長率が低いほうが聞き取りやすくなります。「えー」とか「あー」とか「うー」とかが多いと聞き取りにくいのです。

ここでも、実は一番冗長率が高いのは対話になります。要するに、これは異なる価値観のすり合わせなので、時間がかかるのです。「えー、まあ、おたくがおっしゃることは分かりますけれども、どうでしょうか、ここはひとつ私としては、実はですね」、ここまで何も伝えていないですね、意味、内容は。このぐらい時間がかかるということです。対話というのは非常に無駄が多いというこ

となのです。

皆さんが受けてきた国語教育というのは、基本的に冗長率を低くする方向に、低くする方向に教え、育てられてきました。これは書き言葉の教育だったからそれでよかったのです。書き言葉というのは、できるだけ冗長率が低いほうが伝わりやすいので、論理的なほうがいい。だから、論理的にしゃべれ、きちんとしゃべれ、無駄なことは言うな、と私たちは教育育てられてきました。

しかし、世の中で、あの人は話がうまいなど感じるの、実は冗長率の低い人ではないのです。冗長率を操作できる人なのです。皆さん、マスコミにいらっしゃいますから、これは実際に経験しているのです。例えば、NHKのニュース、7時のニュースと9時のニュースでは冗長率が違いますよね。7時のニュースは、一定時間内にきちんと情報を伝えなければいけないから、冗長率が低くなります。9時のニュースになると、キャスターのちょっとした見解が入ってきます。「ああ、こういうことがあるんですね」とか、「ああ、もうこんな季節になったんだ」とか。

民放10時の報道ステーションになると、さらに冗長率が上がります。ただし、ある特定の方たちに古舘伊知郎さんがちょっと人気がないのは、多分想定より冗長率が高いのでしょうかね、あの方は。だから、ああ、余計なことを言うなど、ある人は思ってしまう。そこをいくと、やっぱり久米宏さんというのは天才で、この冗長率の切りかえがものすごく早くて、ものすごく的確だった。

要するに、冗長率を操作する力が実はいま最も求められているコミュニケーション能力なのです。そして、そのポイントは、対話というのは実は時間がかかる、その時間がかかることに耐えるということなのだと思うのです。

そういうわけで、私たちは、会話の文化、冗長率が低い、あまりしゃべらなくても通じる、日本人なら分かってよ、日本人なら察してよ、という文化をつくってきました。そして、これが日本というnation、最も純度の高い国民国家です。

特に、私たち言語の世界から言いますと、1億人以上がしゃべっている言語で、国境、国家の境界線と言語の境界線が完全に一致している言語というのはものすごく珍しいわけです。というか、ほかにはないわけです。

例えばインドネシア語。まずインドネシアという国自体が植民地支配の結果できたような国境線を持っていますから、端っこのほうの島に行けば、インドネシア語が通じない島がたくさんある

わけです。一方、インドネシア語はマレー語を母語としていますから、マレーシアの方とインドネシアの方は口語レベルでは9割方通じると言われています。大きな言語というのは必ず国境を越えるのですけれども、日本語だけは全く越えないのです。日本語は世界で10番目ぐらいに大きな言語なのですけれども、ここが日本語の最も特徴的な点です。だから、国民国家がものすごくつくりやすかった。

しかも、日本人はこの国家像しか知らないのです。これが国家かと思ってしまう。ここに日本という国の大きな限界があるのではないかと僕は思っています。で、それでもいいのです。日本は本当に住みやすいし、僕は海外で随分仕事をしていますけれども、日本は本当に住みやすい、本当にいい国だと思います。大好きです。

### 日本の生き残りは「state」化

でも、僕の預かっている学生たちは、一生日本の中にいるわけにはいかないのです。もう外国人と一生コミュニケーションをとりませんというわけにはいかないのです。日本が鎖国するのなら、このままでいいと僕は思います。でも、鎖国するためには、人口3,000万人まで減らさなければいけないのです。放っておいても7,000万人までは減るそうですけれども、3,000万人にはなりません。そうすると、外向きの対話の能力がどうしても必要になる。それは単に1人1人が対話の能力を持つということだけではなくて、日本の国自体が、少しずつ「nation」から「state」へと変わっていかない限り、この国はもうもたないのではないかと思います。

日本は、日本語と、それから東シナ海という荒い海という2つの障壁を持っていて、あしたすぐに移民、難民が流入してくる国ではないですよ。僕は、これは天の恵みだと思っています。そのこと自体に反対な方もいますね、従来型の左翼の方とか。でも、僕は、これは天の恵みだと思っています。あと20年、30年はこのままもつと思うのです、じり貧になりながら。

でも、30年後には——例えばいまの新宿区、人口の1割は外国人です。生まれてくる子どもの2割近くが親のどちらかが外国籍です。新宿の大久保小学校、普通の公立小学校ですけれども、7割が、親のどちらかが外国籍です。

T P P、いま関税のことが問題になっていますけれども、最大の問題は労働力の自由化です。労働市場の自由化ですよ。当然、日本の中にも、

30年後には、1割はおそらく異文化の方、日本語を母語としない方になると思います。そのときに、いまの日本社会で耐えられるのかどうかということです。ヘイトスピーチのいまの状態をみても、もっと悲惨な、もっと悪質ないじめや社会の分断が起こることは容易に想像できるわけです。

そうすると、この住みやすい国をできるだけこのままの状態に保ちながら、どうやって国を開いていくかということとは最大の課題だと僕は思うのです。そのためには、国の形を少しずつやはり「state」に変えていかなければいけないのではないか、ということです。民主党政権が本来しなければいけなかったことはそこにあるのだと思うのです。

僕は、民主党政権がずうっと続けばいいとも思っていないし、要するに、急に変わることはできないのです。だから、「nation」を大事にする、nation 的なものを大事にする自民政権と、「state」になっていくんだという民主党政権が、健全に8年ぐらいごとに政権交代するのが、多分、徐々にこの国の形を変えるのには一番いいはずなのです。ただ、残念ながら、いまはそういう状態になく、両極端に振れてしまうというのが現状ですね。ここに一番の問題があるのではないかと思います。

用意したのはここまでです。

鳩山さんには、「対話の言葉をつくっていきましよう」という話をずうっとしてきました。時間がかかるけれども、よく国民と対話したいという政治家はいるのです。でも、それだけではもうだめなのだ、そうではなくて、国民が対話している中に政治家も入っていくのだ、ということをお願いしてきました。

だから、できるだけ政治の役割を低くして、国民同士が対話する、これが本当の意味での新しい公共の一番の狙いでした。国民同士が対等な人間関係を築いて、要するに既得権益に縛られずに対等な人間関係をつくって、対話型の社会をつくっていく、そこに政治家も、その1つの役割としてそこに入っていきような社会というのが私たちが目指したものでした。そのための演説であり、ツイッターをはじめ、「鳩カフェ」というカフェを始めました。カフェが象徴的だったのです。

カフェというのは、特に私がいる大阪大学は哲学カフェという伝統があって、哲学カフェというのは、これもフランスで始まったものですが、まさにカフェで、教会のかわりみたいなところがあるのですけれども、日曜の朝、2時間ぐら

い集まって、哲学者が来て、哲学者は別に何か教えるわけではなくて、ファシリテーターとして、例えば愛とは何かとか、尊厳死は許されるかとか、そういうトピックを市民たちが話していくわけです。その中に哲学者も入っていくというのが哲学カフェなのですけれども、同じようなことを官邸の中でできないか、というふうに考えました。

例えば、子育てカフェ。子育てをしているお母さん、お父さんに集まっていただいて、10人ぐらい集まっていただいて対話をしていただく、議論をしていただく。その議論がある程度30分ぐらいなところで鳩山さんにも来ていただいて、そこに一員として入っていただく。鳩山さんには、口を酸っぱくして「しゃべり過ぎないように」と。「きょうは聞く日ですから、言いたいことはもちろん言っていますが」と言って、カフェの一員として入っていただきました。残念ながら、この「鳩カフェ」というのは2回で終わってしまいましたけれども、そういったことを、試みとしてはやってきました。

所信表明演説や施政方針演説は、短冊を集めてつくるといふ過去のやり方からは一時的に脱却はできたのですが、そうはいつても、なかなか制約が多くて、思いどおり書けるものではなく、対話は、冗長率が高くなるというものでしたけれども、どんどん長くなってしまいます。そうは言っても入れなければいけない文言もあるので。そういういろんな制約がありましたけれども、何とかなのか、一石を投じることができていたとすれば、多少の役割は果たせたかなと思っております。

ちょうど40分ぐらいのところなので、どうもありがとうございました。（拍手）

## <質疑応答>

**司会** きょうは「文明」と「文化」、「対話」と「会話」、いろんな意味で深く考えさせられるようなお話をいただきました。

私のほうから幾つかご質問をします。

1つは、先ほど、日本、ドイツ、イタリアは遅れた国である、それは言語が統一されるのが遅かった、未成熟な状態で、ある種の帝国主義戦争に巻き込まれたということでしょう。その一方で、いまはグローバリズムという名のカジノ資本主義みたいなものに対して非常に反発がありまして、それに対して、ある種のナショナリズムがいろんなところで起きている。これは健全なことなのかというのが1つあるんですけれども、しかし、



これは日本が近代化してからずっと、ある種の永遠の課題なんですよ。

昔は、西洋を受け入れるのは、それは技術として受け入れるのであって、心は違うんだよと、道徳はわれわれの日本人の中にあるんだ、それを逆にうまく使い分けながら、使い分けがきかなくなったところが、おそらく先の戦争だと思うんですけどもね。ただ、この微妙な使い分けというのも、先ほど、「nation」なものを軸に置いて、しかし、「state」への道とおっしゃいましたけれども、この微妙なバランスが難しい。

そうやって考えると、これは一方を捨てて、一方の道を進むというのではなくて、ここはむしろその操作をうまくやることを徹底して、気持ちは日本人、どこにもない、それは誇るべきことだと思うので、そういうぐあいにできないものかというのをまず、お話を聞いて思ったんですね。

### 日本全体が「ダブルバインド」

平田 僕は政治家でも政治学者でもないのに、処方箋を持っているわけではないのですが、芸術家というのは、どちらかというと、道徳を振りかざすよりも、いまの社会はこうなっていますよ、ということを示すのが芸術家の役割で、僕はよく、いまおっしゃられたような状態を言語の観点から「ダブルバインド (double bind)」というふうに呼んでいます。

ダブルバインドというのは、心理学用語なんですけれども、分かりやすく言うと、お母さんが子どもを連れて散歩に出て、近所の人と会って、「いや、もううちの子は勉強できないんですけど、子どもは体だけ丈夫ならね」と言って、家へ帰った途端に「何、この成績は」と言う、これをダブルバインドと言うのです。子どもはきょとんとしてしまうわけです。え、さっき、いいって言ったじゃない。

これは大人にとっては、まさに内と外の使い分けなのでしようがないんですけども、子どもは区別つかないですから、これが繰り返しひどく行われると、これも心理学用語ですけども、操られ感とか、自己喪失感、要するにアイデンティティの崩壊ですね。あまりにいろんな異なるコマンドを入れられると、コンピュータがフリーズするのと同じで、子どももフリーズしてしまうのです。これが引きこもりとか人格障害の原因になるのではないかと心理学の世界では言われています。

家庭の中でも、このダブルバインドが強いと引きこもりが起こるわけですから、いま僕は、まさにおっしゃられたように、日本は、日本全体がこのダブルバインド状態にある。要するにグローバル、グローバルと言っている一方では学校の教室とか企業の中でも「空気を読み」、「上司の気持ちを察して動け」というふうに言われるわけですよ。これは明らかに日本的なコミュニケーションですね。これは日本全体がダブルバインド状態にあるので、これはもう引きこもりとか、あるいは国全体が内向きになるというのはしょうがないこと、当然の帰結だと思います。

ただ、問題は、このダブルバインド状態を、100年前だったら、夏目漱石とか森鷗外みたいな超エリートだけが悩んでいればよかったわけです。あの天才、夏目漱石がロンドンでノイローゼになったわけですね。あの秀才、森鷗外がかのように生きると覚悟を決めて、二重生活を送ったわけですね。

ところが、いまの若者たちは、自分たちが何に苦しめられているかさえ分からずに苦しんでいる。もっと始末が悪いのは企業の側ですね。自分たちが若者たちをそういうふうに苦しめているということさえ自覚なしに、無邪気に全く異なるコマンドを若者たちに与えている。

ですから、まさにおっしゃるように、このダブルバインドを一旦引き受けて、僕は、「日本というのは大変なんですよ。日本人、日本社会が国際社会の中で生きていくということは、明らかに矛盾を抱えることなんですよ。この矛盾を抱えたうえで、じゃ、どうしましょうか」と。そのときに、先ほど言ったような、冗長率の切りかえみたいな、ある種の技術ですよ。コミュニケーションの技術、あるいは政治の技術というものを、日本的な技術を生み出していかない限り、これはヨーロッパに先例がないんですよ、この部分に関しては。まず、ここの現状認識と、じゃ、どうしようということをお話していかないと、おそらく解決はないと思っています。

司会 2つ目は、先ほどの民主党の失敗。ある意味では、国家をどうするか、どう考えるかということの大きな分かれ道だったのに、その自覚がなかった、あるいは少数の人しか分かっていなかった、というご指摘なんですけれども。それから、自民党の政権が長く続いた、これがある意味では極めて不合理だったとも言われました。

僕はちょっと違うんですね。そうではなくて、

自民党政権がなぜ54年間も続けることができたのかということに対する民主党の認識がなかった、これが一番私は失敗だと思うんですね。それは冷戦だったり、中選挙区制だったりしたんでしようけれども、自民党の中である種の疑似政権交代が行われていて、野党が政権をとるまでもなく、高度成長論者と安定成長論者が交代でやるということをやっていた。

それから、日本的な、同じ言語のこういう国の中で、中産階級を、日本ほど社会主義的な国がないと言われるほど、結果の平等もかなり重視した。これは、いろんなスキャンダルもあって失敗したけれども、ここのところを学びながら、それを踏まえて、そのうえにさらにどういう国をつくるかということまで考えたのかという、その形跡がみられない。そういう意味では政治を侮っていたと思うんです、単独政権が続いたことの歴史に対して。その謙虚さがなかったというのは、私は一番の大きな民主党の失敗だったと思うんですけれども、そういう考えについてはいかがですか。

### 民主党の失敗

**平田** それはもう、まさにおっしゃるとおりだと思います。もう、これも皆さんのほうが多分取材なさっていて実感なさったと思いますけれども、民主党というのは、本当に「学級委員体質」なので、みんな優秀なんですけれども、要するに自分の意見がずうっと通ると思って生きてきた人たちなので、まさに民主党内にも対話の言葉がなく、対話どころか、ネゴシエーションとか、そういうことは非常に苦手な人たちでした。それはまあ僕は、もうはたで見ていて、これは厳しいだろうなという感じはありました。

ただ、少し補足させていただくと、要するに、日本というこれだけの大きな国が、落ちたとはいえGDP2位とか3位の国が、「nation」のままではいられたのは、やっぱりおっしゃられたような冷戦構造があって、ある部分「state」でなければやっていけない部分を全部アメリカに頼っていたわけですね。それは限界に来て、だからこそ冷戦構造が崩れて以降、政治が完全に流動化したわけです。そのところのダイナミズムもやっぱりちょっと民主党は捉え切れなかったのではないかという感じはありますね。

**司会** 私、もう1つ質問なんですけれども、この『総理の原稿』という、松井孝治さんとお2人で書かれた本で、それから先ほどもおっしゃって

いましたね、いま、政治家がいて、国民とどういう関係にあるべきかと。それはカフェもそうだったし、要するに、ある種のギリシャのとき以来の、それをどうやっていまの現代の中で再現したらいいのかというのが原点にあるのではないかなというぐあいに、ポリス政治を再現しようとしたと思ったんですけれども。

この中で、ツイッターの教訓というので、先ほど、国民と対話する、その中で政治を行うということでツイッターの役割というのは非常に重視をされて、それは不特定の人との間のツイッターであり、特定の人との間の鳩カフェであり、だったと思うんですけれども、私はこれに対しては根本的な疑問があるんですね。ツイッターについては、いま、オバマもやっている。自分でやっているかどうか別にして。安倍総理大臣もやっている。

しかし、つぶやきで政治ができるのか。つぶやきをやっているぐらいなら、むしろ現場に行って、苦しんでいる人のところへ行くのが筋であって、そして、そのつぶやきを聞いたことが、何か、ある種の国民の意見を分かったかのような錯覚を起こしている。一体何万件反応があったか、それが何だ、と私は言いたいですね。

大阪市長の橋下さんは、このごろ少なくなったようなんですけれども、めちゃくちゃやるんです。テレビで一緒に出るときも、放送が始まる前までやっているんですよ。なぜやっているのか。そんなことを夜中まで、ずうっと遅くまで起きていて、それで物を考えることができるのかと聞いたことがある。そしたら、これが私の気分転換なんです。さんざん悪口言われて、それに対して、それこそ「倍返し」じゃないけれども、返すために、それで私の精神状態を守っている、と言った。何と悲しい人なんだろうと私は思ったんですけれども、日本の最高リーダーとして、ツイッターをやるのが政治なのかと私は、もう根本的に疑問がありますね。

まず細切れになりますね。そして、総理大臣がそんなに国民目線になってはいけないのであって、それも包み込むような大きな目線じゃなきゃ。カフェで会話するのが大事な政治なのか、私は根本的に疑問があります。私の個人的な意見ですけれども。

### 「呼び水」としてのツイッター

**平田** ツイッターについては、ちょっと誤解があるかと思います。

私たち、官邸の中で、松井さん主導で、国民と

政治の距離を近づける検討会をつくって、いろんな方に入っていました。例えば「おくりびと」の脚本家で、いま「くまモン」の仕掛け人の小山薫堂さんとか、いろんな方に入っていたんですけども、そこでは、一応、メディア戦略をもうちょっと整理するべきではないかと。当然、そうは言っても、ツイッターなりフェイスブックなりブログなりは、何らかの形では、こういう時代ですので、使っていかなければならない。そのときに、ツイッターに関しては、これはもう呼び水であると。ですから、鳩山さんの場合には、ツイッターは1日に1回ないし2回です。2回以上やったことはないと思います。

それから、政治的な発言はほとんどしていないはず。あったこととかを報告する。で、政策的なことはブログ、ホームページにきちんと書く。それを見てもらうためのもの。やはりアクセスが、それまで全然少なかったんです。何かの事件があれば別ですけども、総理の書いているものというのは少なかったんですけども、ツイッターによって、ツイッターフォロワーが最大時60万人ぐらいいましたかね。その方たちはほとんどブログにも流れてくるので、そのためのインターフェースとして使ったということなので、要するに橋下大阪市長とは全く違うということ、一応そういう戦略があって使っていたということです。

で、もちろん鳩カフェについても、それはいろんなご意見があると思います。総理の立ち位置をどのぐらいに見積もるかというのは、どれが正しいのか、僕も分かりません。ただ、やはり僕個人としては、これは所信表明演説、施政方針演説でも申しあげてきたことなんですけれども、やっぱり変わった、あるいは変わるんだという雰囲気を見せたかったということはありません。で、官邸の雰囲気が変わったんだ、やっぱり子育てカフェをやって、子どもたちをみんな連れてくるわけですよ。中には障がいを持ったお子さんとかもいて、官邸の中を、奇声を発して走り回ったりして、それは、ああ新しい時代が来たんだなという感じはやっぱりあったんですね。

で、新しい公共の円卓会議のときにも、いままで官邸の外で、いまもそうですけれども、官邸の外でデモやっているような人たちが意見を言えるようになったわけですね。それはやっぱり政権交代の数少ない1つの成果だったと思うんですね。

だから、そういう意味では変わったということを出したかったということはあると思います。

**司会** はい、分かりました。それでは、会場の皆さんからご質問なりご意見なり、どうぞご遠慮なく。

**質問** 何と言いますか、対概念で、日本のあり方、現状みたいなものを鋭く分析されて、非常に参考になったんですけども、いずれも、文明と文化にしても、文化の中で、非常に普遍的で汎用性のあるものが文明として世界にあまねく伝わっていくものであって、というような分類だと思うんです。「state」とそれから「nation」も、そういう自然発生的なものからもうちょっと汎用性の高いものという、「会話」と「対話」も同じような文脈なんです。

そういうふうに分けていくと、1つ知りたいと思ったのは、日本は、確かに島国という地政学的な1つの歴史のいきさつとして、いまこういう文化をつくりあげてきたと思うんですが、その文化の中で最も日本的なものは一体何なのかと思ったときに、私、実は天皇制じゃないかと思うんですね。そうすると、天皇制というのをこの政治の中でどう捉えていくかというときに、まず平田さんがそれをどういうふうに捉えるのかということ、民主党政権というのは天皇制について何か考え方があったのか、なかったのか、どうしようとしていたのか、その辺で、もし平田さんが感じられたことがあればちょっとお聞きしたいと思います。

### 「天皇制」をどう考えるか

**平田** まず、最後のご質問は難しいですね。民主党というのは、まあ自民党もそうですけれども、民主党の中には旧社会党系の方もいらっしゃるって、相当、批判的な意見も伺ったこともあります。天皇制に関してです。逆に非常に右寄りの方もいらっしゃるわけですから、これはもうめっちゃくちやだったとしか言いようがないと思います。

天皇制の問題は非常に大きいと思います。これから日本という国が国際社会に開いていくときに、これは私がかかわっている国語教育とかもそうですけれども、当然、日本語を母語としない日本国籍保持者、当然肌の色の違う日本国民というのがこれから一定数出てくるわけです。その方たちにどうやって天皇制を理解してもらい、陛下に対して尊敬を持ってもらうかということは、政治にとっても大きな課題になると思います。憲法では、国民統合の象徴なわけですから、本当の意味での国家の象徴となるような施策というのは、も

のすごい大きな政治課題だと僕は思っています。大変だと思います。

**質問** 日本という国の文明化という道の中では、ある意味ではもうちょっと、少し制度を変えていくというスタンスもあると思うんですがね。やはりそれはそれとして残していったほうがいいかどうか。

**平田** そうですね。それは相対的なものだと思いますね。例えば、女性の天皇でも、絶対反対という方もいれば、全然構わないという方もいると思います。いずれヨーロッパの王室のように、外国籍の方と結婚するという可能性は全くゼロではないですよ。恋愛をしまえば。そのときにどういう議論になるかということだと思います。

ただ、当然リベラルな政権でしたから、例えば、僕が官邸に入ったときに言われたことでは、ちょうど2010年の日韓併合100年の前の年でしたので、陛下の訪韓ということは、もう今だったら全く議論にもならないと思いますけれども、当時は、官邸の中ではそれができるかどうかということは少なくとも議論しておこうということは言われていました。地方参政権の問題も含めてですね。

で、僕でさえも、これはなかなか難しいだろうなあと思いましたが、エリザベス女王は当時まだアイルランドに行っていなかったのです。つい、先般行かれたと思うのですけれども、僕は学部時代に韓国に留学しておりますので、僕の個人的な思いとしては、エリザベス女王より先に行ってもらいたいという気持ちはありました。

普通に冷静に考えていただければ、ナショナリズムの右とか左ではなくて、今後50年、100年考えて、元首かどうかは別にして、この象徴という存在、まあ元首に近い存在が隣の国に行けないというのは、やっぱり異常な状態なんですよ。これはどこかで解決しなければいけないです、どのタイミングかは分からないけれども、どこかで解決しなければいけない、韓国も中国も。それはどの政権になったとしても、これからの大きな政治課題だと思います。

### 評価分かれる鳩山演説

**質問** きょうのお話の題は、「首相の演説と日本の政治」というものなんですが、鳩山さんの演説ですね、どうも私にはとんちんかんことを言

ったという印象しか残らないんですが、おっしゃる対話力の強化ということについて、あの方がどれだけそれを理解して、そしてそれを具体的にどんな形でアウトプットしたか、その成果については、平田さんはどうお考えになりますか。

**平田** まず、前半の部分に関しては、評価が分かれることは重々承知しております。いまでも、すごく評価していただいている方と、とんちんかんだとおっしゃる方がいる。

で、ぜひご理解いただきたいのは、評価は分かれているんだということをご理解いただきたい。あれがすごくとんちんかんに聞こえる方もいれば、あれがすごくすばらしい演説に聞こえる方もいるということをご理解いただきたいのです。それが私たちが、ある意味、目指したものであると、いいと思います。要するに、変わったということを示したかった。

というのが、僕はお手伝いするだけで、政策の中身は関係ないので——関係ないと言うと無責任に聞こえますけれども——僕はそこまで踏み込んではいけなかったと思っていましたので、そのときに、どう伝えるかという、伝え方に関しては非常に新しくなったということだと思います。

では、鳩山さんがどのぐらいそれを理解していたかということですが、基本的な演説作成のプロセスは、まず最初にブレインストーミングをして、鳩山さんが何をしゃべりたいのか、何を目玉にしたいのかということをお伺いして、松井官房副長官と秘書官が草稿をつくり、そこに僕が手を入れ、あるいは冒頭部分だけは先に僕が書き、というようなプロセスで1カ月ぐらいかけてつくりました。ですので、意外とという変ですけども、いままでの総理の原稿以上に、特に施政方針演説なんかは、いままでの総理のもの以上に、鳩山さんのご意向というのは入っていると僕は考えています。

**司会** それにちょっと関連してなんですけれども、私は鳩山演説というのは、これは歴史に残る演説だと思うんですね。命を大切にしたい、と極めて率直に、そしてガンジーの引用も、労働なき富について——自分のことを言っているんじゃないかという、そういうやゆする声もありましたけれども。

**平田** すみません、それについては僕も最初に、本当にブレインストーミングの最初の段階で鳩

山さんがそうおっしゃられたので、「いや、でも、それは鳩山さん、自分のことだと突っ込まれますよ」と言ったら「いい」とおっしゃったんです。

**司会** そこなんですよ。

**平田** 分かっているからやるんだと。

**司会** そう。ここはいいですね。私は、非常に演説は評価する。しかしその演説は、まあ本人の意向はあったにせよ、誰か書き手がいて、ケネディとソレンセンみたいな関係で、問題は、それをどうやって具体化するというのは、政治というのは可能性のアートなわけですから、その乖離、そのどうしようもない乖離、沖縄の問題もそうですね、あれだけ海外、県外と言っているながら、そのために何をしたのかということ、ほとんどやっていない。その乖離は内部にいて分かりませんでしたか。

**平田** いや、もうそれは何というか、ほとんど僕の職権ではないというところはあるのですが、要するに、もう僕は選挙の段階から、多少おつき合いがあったので、とにかく官僚たたきはやめたほうがいいですよ、とかいうことはずっと申しあげてきました。でも、本当にその官僚の使い方が下手だった。

それから、皆さんも取材をなさった方は分かると思うんですけども、中には、もう舞い上がってしまって、政務官、副大臣レベルで自分より年上の官僚を呼び捨てにしたりとか、それはひどい状態がたくさんあったんです。それはもう、官僚のやる気をもそぐような方向ですね。

これは、ただ、最初の政権交代だったので、特に菅直人さんに代表されるように、官僚というのは全部うそつきで、全部自分たち——要するに野党にいたから——に情報を出さないんだみたいな、すごく強いコンプレックスがありましたね。それはもう見ていて、何というか、あ、これじゃうまくいかないよな、という感じはありましたね。

**司会** その意味では、非常に残念だと思うんです。

**安部首相は「対論型」**

**質問** ありがとうございます。いまのことを伺いたいんですけども、安倍さんの話を聞いて

いると、例えば「あなたは間違っている」とか、「はっきりと」だったかな、それから「絶対に」とか、断定とか、それから決めつけというのかな、非常にそういう表現とか副詞の使い方が多いような印象を受けるんですが、まずそれをどうごらんになっているかというのが1つ。

それからもう1つは、やっぱりこういう言い方を突き詰めていくと、アジテーターとどこに差が出てくるのかみたいなどころにいきかぬない気がするんですね。いや、安倍さんがそうだとは言いませんけれども。アジテーターと政治家の演説というのは、どこら辺で線が引けるのかということをちょっと教えてください。

**平田** きょうの文脈で言いますと、安倍さんがいまお使いになっているのは、この中で言うと、対論、ディベート (debate) の文法が非常に強いかなと思います。相手を打ち負かすタイプですね。先ほど名前が出た橋下大阪市長なんかもそうなんですけれども、対論と対話、どう違うかとよく聞かれるのですが、対論というのはAとBが闘って、一方が勝つ、Aが勝つと、BはAに従うからAになるんですけども、Aはそのまま変わらないのです。対話というのは、AとBが対話をして、Cという新しい結論を出すというのが対話で、お互いが変わっていくことを、もう最初から前提としてコミュニケーションをとるとというのが対話なのです。

本来は、民主主義国家、民主政治というのは、この対話を前提とするんですけども、どうも今の状態はこの対論型になっている。

さらに申しあげれば、いままでの自民党政治というのは、政治家はこの演説と会話だけやっていればよかったんですよ。特に、中選挙区制というのはそういう政治で、要するに田中角栄さんなんか象徴される、演説はものすごくうまい。それから後援会組織に守られていて、後援会での会話もものすごくうまい。まさに「nation」、要するに自分と同質の人たちに票を入れてもらえば中選挙区制というのは必ず通るんですよ。

本来、小選挙区制というのはそうではなくて、対話がもとになっているはずなんです。人数が少ないので、1対1でちゃんと市民と対話することが小選挙区制にとってはどうしても必要なんですけども、この文化がまだ育っていないというのが僕の切り取り方です。もちろん、これにもご異論があると思いますが、いずれにしてもこのダイアログのところを政治に少しずつでも

定着させていかななくてはならないということなんだと思います。

昨今の国会の運営の仕方とかについては、保守派の方でさえも多少ご懸念があると思うんですね。要するに、この対話というのが全くなくなってしまっているのがいまの状態だと思います。

ただし、対話は時間がかかります。なかなか決められません。全く決められなければ困るので、まさにこれは対話の文化をつくっていくということですね。どこら辺で落としどころをしていくとか、そういうことがまだまだ日本の国会は未成熟なんだろうなと思います。

**質問** ちょっと抽象的な聞き方なんですけれども、要するに、われわれ裏側の人間、知らないことを前提にして——多少は知っていますけれども、知らないことを前提にしてやった場合に、そういうゴーストライターみたいのがいるということそのものも含めて、もっとオープンにして、そして、こうなんですよということをやることのほうが大事ではないかと思うんですよ。平田さんのいろんなご努力は存じあげていますけれども、平田さんの存在を含めて、知っている人は知っているでしょうけども、その辺がオープンになっていない。これは世界どこでもそうなんでしょうけれども。

ただ、結果として、受けとめるメッセージでいくと、オバマさんの言うことは非常に分かりやすく明確だ、日本の政治家は何かアピール度が弱いとか。それはただ言葉の問題だけではなくて、論理的な考え方とか、さっき言った、いろいろあるんでしょうけども、その辺で何か、いまのスピーチも含めたやり方に、もうちょっと平田さんがおっしゃっていないところで問題があるのでは。

というのは、大平さんという方は、「あーうー」で有名でしたしけれども、じゃ、政治の評価はどうだったかというのはまた別だと思うんですね。その辺のことをもう少しかかみ砕いて説明していただけないでしょうか。

**平田** まず、自分でゴーストライターと言ったことは一度もなく、スピーチライターであるということは公言していましたし、そのために内閣官房参与という役職に、わざわざ就きたくもないのに就かされたわけで、それは民主党政権が非常にいままでの政権よりは真面目だったということだと思います。もうご承知の方も多いと思いますけれども、いままでは、短冊を集めてきて、秘

書官とか官邸が書いて、それで最後に、例えば昔だったら安岡正篤さんみたいな方がちょこちょこ何か故事来歴みたいなのをに入れて、それでできたわけですよ。

それは本来は、法的に言うと、違法行為ですよ。要するにそういう役職にない方が事前に所信表明演説や施政方針演説の内容を知っていたということですから。そこで、多少なりとも守秘義務がかけられる内閣官房参与に私が就いた。そのことは全く秘密にしていまませんでしたし、後から取材を受けて、もちろん書くまでは、書く内容はオープンにできませんから、しかし、書いているということ、あるいはそういうふうになっているということ、あるいは秘密にしたことは一度もないのです。だから、鳩山政権でそこは変わったということなんです。

**質問** もうちょっといいでしょうか。

それとも関係するんですけれども、ちょっと恥をさらしてしまうようなことですが、私たちの先輩は皆さん政治家と仲よくて、全部演説を書いてあげて、それはもう有名です。いろんな方がいます。もっと親しい方もいるんですけれども、そういうことも含めて、分かっている人は分かっているけれども、分からない国民が多かった。

さっき言われた、国民との対話というのは、実は、そういうことも含めて、いまのマスコミと政治との距離感はあると思うんですけれども、それも含めてこういうことを考えていかないと、実際には国民には伝わらない部分で……。今回の秘密保護法もそうですけれども。

### 総理のために命を賭す体制を

**平田** これももうすでにいろいろなところで申しあげてきたことなんですけれども、僕は本当に政治は素人で、本当にいきなり何か「不思議の国のアリス」みたいに、官邸に引っ張られていったので、いろいろ分からないことはあったんですけども、まあ素人なりに見てみると、要するに橋本内閣あたりから非常に官邸の強化というのがなされてきて、それはそれでいいことだったと思うんですけれども、その強化というのが非常に何というか、最終的に官僚主導になってしまって、官僚というのは省庁から来るわけですから、結局、各省庁の寄せ集めのチームのままなんですよ、いまの官邸は。実際にはその官邸の力というのは、権限だけ肥大化していて、実際のスタッフがまだまだそろっていない、それから自前のスタッフを

持っていないということです。それは、最終的に言うと、要するに政権交代に備えた官邸システムになっていないということなんです。

いままでは、自民党がずうっと政権を持ってきたから、その部分は党の方で補ってきたわけですよ。党の幹事長なり政調会なりで補ってきた部分があるわけですよ。それが政権交代で一挙に官邸に権限を集中したわけですけども、そんな自前のスタッフはいないから、私たちのような民間の人間がテンポラリーに行って、どうにかしよう、やろうやろうみたいに、ツイッターだ、鳩カフェだとやっても、これは限界があるんですよ。

皆さんご承知かと思いますけれども、オバマ政権、大体、1期目で、私のような職種の人間が200人ほど常勤でいたそうです。そのぐらい、まあ200とまでは言わないけれども、要するにこの総理のためなら命を張れるみたいな人が、官民間問わず30人ぐらいは、せめて——経団連の会長になると相当チームをつくりましますでしょう——あのぐらいの感じはちょっと要るんじゃないかなというのを思いました。それが無いというのは……。だから、また同じことを繰り返しますよ、政権交代が起こっても。

**質問** 最後に、ちょっと一点だけ。唯一、私、民主党がいいなと思ったのは、私たちフリーランス記者を、記者会見に入れてくれた。私ももともと記者クラブに入っていましたけれども、それまでは記者クラブが閉鎖的で入れてもらえなかった。それをオープンにしたという点はいいいんです。それから、仕分けですか、それはいいんですけれども、あまりにも下手くそ過ぎたり、混乱していたということですが、オープンだけは評価できる。いまはまただんだん締めつけがきつくなって、また逆戻りしているなという嫌な気配を感じられます。その辺、最後、コメントいただければ。

**平田** 官邸も、全く一枚岩ではなかったのも、秘書官も相当ばらばら、チームワークは悪かったですよね。すごく保守的な秘書官の方もいれば、革新的な方もいらっちゃって、名前は出しませんが、もう皆さん多分ご存じだと思うので、だから、オープンもすごく中途半端になってしまったし、バタバタになってしまったというのはあると思います。

**質問** いまの議論と関係するんですけども、日本の政治というのは、議論とか、会話とか、言

葉で政策というのはつくっていかれているんでしょうか。われわれが見ていると、そうでなくて、もうすでに官僚がつくっている文書とか、それから上下関係で、言葉がないまま、電話でもって「そうか」とか「どうする」とか、そういう形で決められているような気がして、本当に人々が会話を通じて政策がつくられているということはあるのかどうかということをちょっと、近くにいた方から聞いてみたいと思います。

### 野党時代に積むべき研さん

**平田** もうこれも皆さんのほうがご専門だと思うんですけども、二大政党制というのは、下野した側の野党が実は非常に重要で、野党の議員というのは恐ろしく暇ですよ、本当に。いまの民主党議員、本当にみんな暇していますけれども、その暇なときにどれだけいろんな体験をし、弱者の声を聞き取り、それからもちろん人間的なものを高めるため文化に触れたりとか、いろんな大学の先生方の話を聞いたりとか、そういう研さんを積む。それから、自分に近い官僚たちと意見を闘わせて、対抗できる政策を積んでいくかということが一番大事だと思うんですよ。

その点について言うと、今の安倍内閣が比較的にうまくいって、内容の是非というのは1人1人違うと思うし、私は全く反対の立場にいるわけですけども、まあまあうまくいっているということは認めざるを得ない。そのときに、自民党が、おそらく野党時代に相当民主党政権をよく思わない官僚たちと一緒に、もし勉強会とかをたくさんやっていて、世耕弘成さんなんか非常に優秀な方ですから、相当準備をして政権のスタートダッシュを切ったんだとすれば、多少政権交代の意味はあったのかなと思います。

ただ、今度は野党があまりに弱くなり過ぎてしまって、官僚も相手にしてくれない状態になっているのは、まだちょっと二大政党制が定着するのに時間がかかるかなと。で、これがうまく均衡が、バランスがとれるようになって、官僚もそれぞれ自分の政策を実現したいときに、どっちの議員につくかということ、もちろん官僚は本来ニュートラルでなきゃいけないんですけども、そうは言っても、例えば僕が一番近い文化行政とか教育行政などというのは、文科省というのは本当にばらばらで、相当揺れるわけですよ、ゆとり派から基礎学力派まで。そうすると、当然いまは、民主党政権時代に活躍していた官僚はみんな冷や飯食っているわけで、そういう人たちときちんと次の政策がつかれるかどうかということだと思

うんですね。

僕は、ある程度そうやってぶれや揺れがあるのが健全な民主主義国家だと思うので、それは本当に、政権交代のシステムと議論というのは対になっていると思うんですね。僕はそうになってくれるといいなあとは言いようがないと思います。

**司会** 政治というのは何なのか、権力とは何なのかというのを考えたとき、自分が権力の頂点に行ったときに、それまで一体どれだけ自分を支える人間をみずからつくってきたんだろうか、というのがありますね。それから、支えなければそれはできないことなんだという自覚がどれほどあるのかということで、その政権の中心の深さ、重さというのをはかることができると思うんですね。

そういう意味では、民主党政権はあまりに幼いというよりも、考えてこなかったという、その根本が、いま言っちゃ悪いんですけども、オープンだオープンだと言ってみたり、そういうことになっちゃうわけですよ。何のためにオープンにすべきなのかというところがないという感じがね。

そうやってみると、一体政治家とは、政治リーダーとはどうあるべきか、ということ、別に特定の人を批判する必要はないんですけども、そのときに官邸の中において、ある種のリーダーに必要なものというのは何なんだろうというぐあいにお思いになりました？

**平田** そうですね。まあ僕は鳩山さんしか知らないのですが、鳩山さんというのは、本当に皆さんもご存じだと思いますけれども、大変いい方で、ただ、やっぱり政治家にはあまり向いていないですよ。まあ、うそがつけられないとか。

ただ、総理大臣というのは、ある種のおみこしなので、平時だったら大丈夫だったと思うんですね。最初に仙谷由人さんとか、無傷なら小沢一郎さんとかが官房長官をやるぐらいだったら、もう少し違ったかなとか、そういう属人的な部分もあると思うんです。

それから、先ほどの繰り返しになるんですけども、やっぱり官邸の強化ですよ。周りの人間をきちんとスタッフとしてそろえる。

僕は内閣官房参与という職に急に就いて、総理と毎週一回ぐらいは会って、食事をしたり、いろいろするわけですけども、これは思った以上に権力があるんですね。で、自分でもすごく自戒し

ましたけれども、とにかく僕は政策のことは、まあ文化政策だけはやってくれと言われたので、文科省によく行ってやりましたけれども、ほかのことにはできるだけ口を出さないようにしようと思いました。

要するに、官僚だけに政治を任せないためにはブレンというのが必要なんだけど、ブレンというのが、いま内閣官房参与ぐらいしか位置づけがないので、非常に不安定で、あとは昔で言うと、審議会政治みたいなものをするしかないわけですね。中曽根康弘さんは多分それをものすごくうまく使われたんだと思うんですけども、これがとにかくまだ制度化が弱いということですね。

だから、鳩山さんだけの問題ではなくて、本当に繰り返しになりますけれども、政権交代に備えるようなシステムになっていなかったなということだと思いますね。

### 危うい？内閣参与制

**司会** 官僚が最大の政策ブレンであるというところを包み込むほど大きいリーダーシップを発揮できないですか。

**平田** それはどうですかね。だから、先ほど申しあげたように、鳩山さんはそうでもないんですけども、周りの人たちが非常に官僚憎し、官僚不信があって、それに対抗するためにいろんなお友達を連れてきて、鳩山さんというのは最後に会った人の意見を一番信じるみたいなのところがあるので、そうすると、お友達がどんどん来ちゃうから、大混乱に陥るみたいなことがありましたね。

で、実際、やっぱり総理に直接会うというのはすごい権力で、僕は本当に友人の政務官とか副大臣から、「これ、総理に言っといてよ」と頼まれて、要するに副大臣や政務官はそんなにしょっちゅうは会えないので、そのぐらいに、何というのか、江戸時代のお小姓みたいなものですよ。だから、こういう人間は本当はいちゃいけないんだと思うんですよ。だから、内閣官房参与の制度自体がちょっと本当に危ういので、あれを乱用するのは——まあ菅さんは完全に乱用してしまったわけですけども、あれを乱用するのは本当にいけないと、僕は自分でそのポジションにいて思いました。

**司会** はい、もう最後になりますけれども、どなたかいらしたら。はい、どうぞ。



**質問** 先ほど、芸術家の役割として、今の社会がこうなっていますよと示すのが役割だとおっしゃいました。短く、ではいまの社会はどうなんだということを一言伺いたいと思います。

**平田** 難しいですね。まず前提として申し上げますと、私たち、特に現代芸術の作家ですから、例えば、一家皆殺しみたいな殺人事件が起こりますね。ジャーナリズムは、「これでも人間か、一家皆殺し」と見出しをつけるわけですね。私たち芸術家は、「これでも人間だ」あるいは「これこそ人間だ」というふうに書くのが芸術家の役割なんです。だから、善悪とか、美醜を超えた彼岸のところで私たちの表現というのは成り立っているんですね。

ですから、例えば、私は韓国問題が専門で、植民地支配の歴史のお芝居をたくさん書いていますけれども、それは植民地支配がいい悪い——もちろん悪いに決まっているんですけども——そうじゃなくて、植民地支配というのはどういうふうに人間の内面、精神に変化を起こすか、人が人を支配するというのとはどういうことなのか、というようなことを書くのが芸術家の仕事なわけです。

そうすると、いまの日本社会で一番関心があるのは、これも途中で申しあげましたけれども、日

本の若者たちが内向きになって、その1つの方向が例えばヘイトスピーチみたいなものにあらわれてくる。で、従来の左翼陣営のようにそれを切って捨てることは簡単なんだけれども、そうじゃなくて、何で彼らがああいうことになってしまうんだろうか。普通の背広を着た方たちとか、子どもを連れた女性とかがヘイトスピーチに参加しているというのはどういうことなんだろうか。その内面とかを描くということが私の仕事だと思っています。

**司会** はい、ありがとうございました。

もう時間に近づきました。この辺でおしまいにしたいと思います。

きょうは非常に次元の高いことから、次元の低いことまで幅広くお話いただきました。ありがとうございました。（拍手）

**平田** どうもありがとうございました。（拍手）

**司会** 極めて簡潔に、本日の演題、「政治における対話とは」という揮毫でした。ありがとうございました。

（文責・編集部）